



Data

監督・共同脚本・製作: ポール・ダノ

原作: リチャード・フォード『WILDLIFE』

出演: キャリー・マリガン/ジェイク・ギレンホール/エド・オクセンボールド/ビル・キャンブ

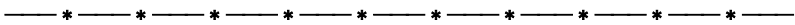
👁️👁️ みどころ

近時は、ハリウッドでも日本でも「原作モノ」のつまらなさが目立つが、個性派俳優から監督デビューしたポール・ダノが選んだ、リチャード・フォードの原作は例外だ。

1960年代の家族の姿を14歳の息子の目線から描く本作は、演出の素晴らしさと俳優陣の抜群の演技力もあって興味深い。夫と妻の価値観の違い、価値観の衝突はどの夫婦にもあるが、「突然の解雇」と「山火事」に端を発した夫婦のズレは切実。そこに、34歳の女性は母親？それとも女？そんなテーマが顕著になると、キャリー・マリガン演じる女の性（さが）は・・・？

本作のラストは写真館での家族写真の撮影。アメリカ人なら誰でも知っている『父親たちの星条旗』に見た、硫黄島の摺鉢山の頂上に星条旗を掲げる6人の兵士たちの写真に対して、本作のそれは家族だけのプライベートなものだが、そのラストシーンの「落ちつき度」は？

たまには、そんな小さな「家族の物語」をじっくり鑑賞したい。



■□■この2人が夫婦役なら、こりゃ必見！■□■

イギリスの女優キャリー・マリガンは、『わたしを離さないで』（10年）の演技で私を魅了した1985年生まれの若手演技派女優。ノーベル賞作家カズオ・イシグロが書いた原作の問題提起のユニークさと相まって、同作は素晴らしい映画になっていた（『シネマ26』98頁）。そんなキャリー・マリガンが本作では34歳の主婦ジャネット役を熱演するそうだから、こりゃ必見！

他方、本作で14歳の息子ジョー（エド・オクセンボールド）の父親ジェリー役を演じたジェイク・ギレンホールは、『ブロークバック・マウンテン』（05年）で、同性愛のカウボーイ役を演じてアカデミー賞助演男優賞にノミネートされた演技派だが、主演した『ナイトクローラー』（14年）での圧倒的存在感はお見事だった（『シネマ36』167頁）。そんな2人が「夫婦役で共演」と聞けば、そりゃ必見！

加えて、本作は『リトル・ミス・サンシャイン』（06年）（『シネマ12』414頁）や、『ゼア・ウィル・ビー・ブラッド』（07年）（『シネマ19』300頁）、『プリズナーズ』（13年）（『シネマ33』139頁）、『それでも夜は明ける』（13年）（『シネマ32』10頁）等、多くの映画で名演技を見せてきた、1984年生まれ演技派俳優ポール・ダノが満を持して初監督をした作品だと聞くと、なおさら必見だ。

ちなみに、ジェイク・ギレンホールも1980年生まれだから、この3人は全員1980年代生まれで、全員まだ30代。若い才能が結集したわけだが、その原作は、ピューリッツァー賞作家リチャード・フォードが1990年に発表した『WILD LIFE』。これは、1960年代の若い夫婦が崩壊していく姿を、14歳の息子ジョーの目線から描いた家族の物語だ。しかし、なぜポール・ダノ監督はそんな古い素材に注目したの？彼はリチャード・フォードの原作のどこに惹かれたの？

■□「原作モノ」の良さを本作で再確認！■□

近時のハリウッド映画は、アメコミを中心とした原作モノが多すぎる。また、近時の邦画もオリジナル脚本がほとんどなく、原作モノが多すぎる。それが、近時の映画界に対する私の不満の一つだ。しかし、本作を観れば、原作モノだからダメなわけではないことがよくわかる。本作のパンフレットにあるポール・ダノ監督のインタビューによれば、「いつの日か映画を作る時は、きっと、家族についての映画を撮るだろう」と思っていた彼は、リチャード・フォードの『WILD LIFE』を読んだ時、「その二面性に不意を突かれ、思わず心の窓が開かれたような感覚」になったそうだ。それからずっと、「親とはなんだろう」という疑問にとらわれて、そこから何か答えを見つけたいと自問自答する日々を過ごした彼は、ある日、「私の初めての映画のラストシーンが頭の中で明確にイメージできた」ことによって、一気に映画化に向けて歩み始めたそうだ。

もちろん、私は原作について何も知らなかったが、1960年代に14歳だったと聞けば、1949年生まれの私もほぼ同じ。第2次世界大戦の戦勝国として、各家庭が家と車を持ち、大きな牛乳瓶の入った冷蔵庫を持ち、スーパーに行けばあらゆる食料品や日用品があふれていた当時のアメリカに比べると、私が14歳だった頃の日本はずっと貧乏だった。しかし、それでも私は父親と母親、そして兄の4人家族で暮らしていた。

本作の冒頭は、家の前の庭で、父親のジェリーと息子のジョーがアメフトのまね事をして遊んでいるシーン。そして、導入部では、ジェリーの仕事がゴルフ場のティーチングブ

ロだということがわかるが、これは当時の日本では考えられない職業だ。さらに、後半から登場する、戦争で足を負傷したものの、今は自動車販売店のオーナーとして裕福な暮らしをしている中年男ミラー（ビル・キャンプ）が乗る車の豪華さも、「さすが戦勝国！」と思ってしまうもの。だって、昭和30年代の日本は、『ALWAYS三丁目の夕日』（05年）で観たように、「オート三輪」がやっと普及し始めた時代だった（『シネマ9』258頁）し、大学時代の私のはじめて松山から大阪まで車でいった時の車は、マツダのクーペ360で、今から見れば大きさといい、エンジンの規格といい、おもちゃのような車だったのだから。

ほぼ同じ1960年代に14歳の少年時代を過ごしたとはいえ、そんな風に私とジョーとはその境遇は全然違う。しかし、それでも両親を見る視線は同じだ。私の場合は、私が中学生になった13歳以降、母親が2人の息子の授業料の足しにするため、外に出て働き始めたことによって大きな変化が生まれ、以降の人生体験が大きく変わったが、さて、ジョーの場合は？そんなことをいろいろ考えると、原作モノの良さを本作で再確認！

■この夫婦に観る価値観の違い、価値観の衝突は？■

弁護士を45年もやり、離婚事件をたくさん処理していると、夫婦間の価値観の違い、価値観の衝突につき合わされることも多い。もちろん、ピッタリそれが一致する夫婦などどこにもいないが、ややもすると、その価値観の違い、価値観の衝突が夫婦の亀裂や離婚に至る原因になる。本作導入部では、カナダ国境にほど近いモンタナ州の町に引っ越してきたジョーたち3人家族が、「子育て観」に多少の違いはあるものの、仲睦まじく過ごしている風景が描かれる。

しかし、ジャネットが買い物に出た時にジェリーの小切手が不渡りになるシーンを見ると、家計は結構苦しいようだ。またある日、ジェリーは突然ゴルフ場を解雇されてしまったから大変。労働法制が完備した今日なら本作のような風景はありえないが、1960年代ならそれも仕方なし？そんな夫をジャネットは励ましていたが、内心はヒヤヒヤだ。そのため、数日後にゴルフ場から解雇を撤回する旨の電話が入ると、ジャネットは大喜び。それを外に出ていたジェリーに伝えるためジョーを急行させたが、何とそこでジェリーは「戻らない」と言い張ったから、アレレ・・・。

「なぜパンプは仕事に復帰しないの？」と質問するジョーに対して、ジャネットは「プライドよ」と説明したが、誰よりもそんなジェリーの態度に納得していないのがジャネットだ。自分の能力（の無さ）を棚に上げて、「理想の仕事」に固執する男は多いから、ひょっとしてジェリーはその類い？本作ではそこまではわからないが、ジャネットがそこで言い争いをせず、「自分が働きに出ようかしら」と提案したのは賢明だ。それに対するジェリーの返事は、「好きにしろ」ということだったが、それは本当に納得しているの？それとも・・・？

■□■「山火事の消火」も立派な仕事だが・・・■□■

そこからの職さがしに見るジャネットの行動力はすごい。さらに、息子のジョーも「ホントはアメフト選手になりたいわけではない」とジェリーを説得したうえ、写真館のバイトを始めることになったが、それを見ていると、学校やサークル活動から学ぶことよりも、バイトから学ぶことがいかに多いかよくわかる。希望した秘書の仕事には就けなかったものの、スイミングスクールのコーチの仕事始めたジャネットは、ある意味でそれまで以上にイキイキし始めたから、その間にジェリーがじっくり生業を見つければこの家族は万々歳だ。

そう思っていると、ジェリーは折りしもモンタナ州で起きていた大規模な山火事の消火の仕事に行くと言い始めたから、ジャネットはビックリ。なぜそんな危険な仕事に？しかも、収入は時給1ドルだから、そんな仕事はジャネットにはあまりにも馬鹿げたもの。ところが、ジェリーの方は、「国民の社会的義務だ」「社会の役に立ちたい」風の、何とも青臭い理論で一方向的に家を出て行ってしまったから、さあ、この家族の行方は・・・？

■□■14歳の息子を持つ34歳の母親？それとも女？■□■

本作前半で描かれる3人家族の風景を見ていると、父親と母親間の価値観の違い、価値観の衝突はあるものの、ジャネットは妻としての役割を十分果たしているし、母親の役割もきっちり果たしている。もっとも、実年齢と同じ34歳のジャネット役を演じているキャリー・マリガンは、実物がキレイだから、母親として食事を作っている時でも、それなりの美しさを保っている。しかし、ジェリーがいつ帰ってくるかも知れない山火事の消火の仕事に一方的に出かけてしまうと、外に出て働いていたジャネットには、少しずつ母親の顔以上に34歳の女の顔が・・・。

それはもちろん、態度だけではなく、化粧や服装等でもハッキリわかるようになったから、ジョーの戸惑いは如何ばかり・・・？小説の世界では、時に「空閨を託つ(かこつ)」という言葉が出てくるが、男の私にはその辛さはわからない。本作の原作者がそれをどこまで理解しているのかもわからないが、本作中盤では演技派女優キャリー・マリガンが14歳の息子を持つ34歳の母親？それとも女？を考えさせる素晴らしい演技を見せるので、それに注目！

主婦業から外に出て仕事を始めると、そこで新たに知り合う人たちも増えるもの。それは、ジャネットのような外交術に長けた女性ならなおさらだ。そして、夫のある身とはいえ、34歳の美しい女ならなおさらだ。しかして、ある日ジョーが学校から帰ってくると、ジャネットはミラーを家に招いており、彼の会社に雇ってもらうことになったとジョーに説明したが、その実は・・・？

■□■ 34歳の母親と14歳の息子の会話に注目！ ■□■

原作も本作も「家族の物語」だから、その中核はジェリーとジャネットの夫婦だが、それを見る視線はあくまで14歳の息子ジョーのもの。したがって、本作ではジョーの演技の出来が最大のポイントとなる。ポール・ダノ監督は自分自身が個性派俳優であるだけに、そこは心得たもので、本作では、ストーリーの節目節目ごとに対象物そのものをスクリーン上に見せるのではなく、ジョーの表情（だけ）でそれを表現しようとしているので、その技法にも注目したい。

それに対して、ある日ジャネットから山火事を見に行こうと誘われて、現実にも目の前に広がるその風景を見た時の母と子2人の表情や会話、またその帰り道に寄ったダイナーでの母子の会話では、2人の会話をモノにスクリーン上に映し出して、その「論点整理」をしてくれる。もっとも、「この炎が彼を駆り立てる。理解できない」とか、「平凡な自分の名前が嫌い」とかは、単なるジャネットの感想にすぎないが、「父さんには女がいる」は、息子に対して言うべき言葉ではない。さらに、「そんなことはない」と慰めるジョーを「ひよっ子」呼ばわりするのは、母子の会話としてはよろしくないはずだが・・・。

■□■ そこまでやるか！ 離婚原因は明白だが・・・ ■□■

弁護士として離婚事件を処理する場合、夫の不貞行為が明らかな案件は多いが、妻側のそれは、疑いはあっても明白にならないケースが多い。そのため、私立探偵を使うこともあるが、費用ばかりかかって効果の出ないケースが多い。しかし、本作では、粉雪が降り始めた頃になってやっと山から戻ってきたジェリーに対して、ジャネットがあっさり自分とミラーとの不貞行為を打ち明けるから、「離婚原因としての妻の不貞行為」は明らかだ。

久しぶりに家に戻ってきたジェリーを見て、ジョーが喜んだのは当然。そして、ジェリーも「ロッキー山脈の森林局の仕事が決まった」と嬉しそうに告げたから、山火事の仕事に従事していた間もジェリーがずっと家族の事を考えていたことは明らかだ。ところが、そんなジェリーに自分からキスとしようとしてもしないジャネットに対して、その不自然さを指摘すると、ジャネットからはいきなり別居話が。そして、さらに何とミラーとの男女関係まで自白したから、ジェリーはビックリ。この変わりようは一体ナニ！

ダイナーで向かい合った息子に対して、ジェリーは「母さんは自分を見失っているだけだ」と言い聞かせていたが、それはむしろ自分に対してであることは明らかだ。したがって、そこで留守中のジャネットの行動を息子に質問し、息子がやむなく話すその真相を聞くと、遂にジェリーは爆発！怒りにまかせてミラーの家にやって来たジェリーが、そこで見せたあつと驚く行動とは・・・？

■□■ 写真館でのラストシーンの「落ちつき度」は？ ■□■

ジョーがバイトを始めた写真館の主人は、「写真の経験はないが、物覚えはいい方です」というジョーの言葉を聞いてすぐに採用。そして、その言葉通り、最初は補助的な仕事だけだったジョーは少しずつ写真館の仕事覚え、今では主人の代わりに撮影できるまでになっていた。記念撮影のシーンをポイントにする映画は多い。『父親たちの星条旗』(06年)『シネマ 12』(14頁)における、硫黄島の摺鉢山の頂上に星条旗を掲げる6人の兵士たちの姿を撮影した写真は、太平洋戦争の運命を変えたもので、アメリカ人なら誰でもよく知っているものだが、その写真撮影の裏話を聞いてみると・・・？

それはともかく、怒りにまかせてミラーの家の前にガソリンをまき、それに点火したジェリーの行為は常軌を逸したもので、現住建造物放火(の1部既遂)に該当することは明らかだから、下手をするとロッキー山脈の森林局の仕事を失うのはもちろん、その将来はお先真つ暗に……。もちろん、そんな可能性もあるが、本作ではポール・ダノ監督の当初の意向通り、ジョーのバイト先である写真館で、家族そろって写真を撮るシーンがラストシーンになる。離婚事件のドタバタ劇を描くとそれはそれなりに面白いものだが、「家族の物語」の代表としてリチャード・フォードの原作を選んだポール・ダノ監督は、それとは全く違う写真館のシーンをラストに置いたわけだ。

もちろん、この写真は家族3人のプライベートなものだから、『父親たちの星条旗』の写真のように全米に残るものではないし、この写真によって家族の再生が可能になるものでもない。しかし、このラストの家族写真は、今や完全に別居生活になっているジェリーとジャネットの心の中に、そして、ジョーの心の中にどのように残るのだろうか？そんなラストシーンの「落ちつき度」を本作ではじっくりと味わいたい。

2019(令和元)年7月31日記